

# 1. 評価報告概要表

評価確定日

平成21年3月12日

## 【評価実施概要】

事業所番号	1570800282		
法人名	社会福祉法人 苗場福祉会		
事業所名	グループホーム深雪		
所在地	新潟県小千谷市大字稗生1460番地1 (電話) 0258-82-0880		

評価機関名	社団法人 新潟県社会福祉士会		
所在地	新潟県新潟市中央区上所2丁目2番2号 新潟ユニゾンプラザ3階		
訪問調査日	平成	20年	12月4日

【情報提供票より】(20年11月10日事業所記入)

### (1) 組織概要

開設年月日	平成 18年 1月 1日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18人
職員数	18人	常勤	14人、非常勤 0人、常勤換算 15人

### (2) 建物概要

建物構造	鉄筋 造り		
	2階	建ての	2階 部分

### (3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	42,000 円	その他の経費(月額)	17,197~ 円
敷金	有( 円)		無
保証金の有無 (入居一時金含む)	有( 円)	有りの場合 償却の有無	有 無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日あたり	円	1000 円

### (4) 利用者の概要 (20年11月現在)

利用者人数	18名	男性	2名	女性	16名
要介護1	4名	要介護2		5名	
要介護3	2名	要介護4		6名	
要介護5	1名				
年齢	平均 84.7 歳	最低	68 歳	最高	96 歳

### (5) 協力医療機関

協力医療機関名	財団法人小千谷総合病院、谷口医院、宮歯科医院
---------	------------------------

## 【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

「グループホーム深雪」は、老人保健施設など多様な事業を運営している社会福祉法人が平成18年1月に開設した事業所であり、小千谷市では2か所目のグループホームである。駅通りに近い住宅地の一角にあり、医院や商店街、神社などもあって人の往来が盛んであり、田畑など自然も豊かな場所である。開設当時、ホームのある東小千谷地区では社会福祉資源が少なく、当事業所の開設は地域住民にとって待望のものであった。また、昔、電力会社の事務所や職員寮があった場所に開設されており、地域からの認知度は高い。  
1階にはデイサービスセンターと居宅介護事業所が併設された複合施設であり、ホームはその2階にある。併設する各事業所とは地域住民や地域活動に対して相互に連携しあっている。地域からの要望もあり、敷地内にある建物を使用して児童保育を受託して地域の小学校児童を受け入れており、子どもたちの賑やかな声を身近に感じることができる。また、事業所は有事の際の避難所としても地域に周知されている。利用者に対しては、畑作りや学習療法のプログラム、デイサービスセンターにあるマシンを使用したりハビリなど、多彩な活動を提供し、張りのある生活が送れるよう支援している。

## 【重点項目への取り組み状況】

重点項目	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	サービスの更なる向上を目指して、サービス評価を活用して具体的な業務改善に取り組んでいる。前回の外部評価結果は運営推進会議や事業所会議でも取り上げ、取り組みを検討した。「家族や地域への理念の浸透」では、できるだけ多くの人から事業所へ足を運んでもらうきっかけ作りに取り組んだ。「虐待の防止の徹底」「身体拘束をしないケアの実践」では、マニュアルを整備し研修会を計画した。「マニュアルの整備」では、介護マニュアルを作成するなど整備を進めている。「重度化や終末期に向けた方針の共有」では、事業所独自の方針を完成させた。「急変時や事故発生時の備え」では講習会を実施した。
重点項目	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	管理者は自己評価を、課題の明確化だけでなく、「職員のがんばりを認める機会」と考え、職員へ自己評価の意義について説明した。職員も、日頃のケアに何が不足しているか振り返る良い機会と捉え、各項目についてグループで相談しながら全職員で評価を行った。職員から提出された自己評価は管理者が集約しまとめ上げ、運営推進会議でも報告した。
重点項目	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4,5,6)
	運営推進会議を2か月に1回開催し、利用者、家族、町内会長、老人会長、民生委員、地域包括支援センター職員を構成委員としている。会議では折に触れて理念を説明し、事業所があるべき姿について委員から意見を聞くよう努めている。具体的な事例対応や行事予定なども議論し、家族や地域住民から利用者の暮らしに関わってもらうきっかけを提供する場として有効に活用している。会議に出られなかった委員へは議事録を送付している。今回の自己評価結果は会議で報告しており、外部評価も会議で報告する予定である。
重点項目	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7,8)
	家族との信頼関係の構築を意識し、家族から気兼ねなく願いや希望を言ってもらえる関係づくりに取り組んでおり、利用者に何か変化があった際は随時家族に伝えるようにしている。また、毎月職員が個々の家族へお便りを作成しており、送付後に家族から感謝の言葉や要望が聞かれることもある。事業所の入口には意見箱を設置して来訪者からの意見聴取に努めるほか、年1回、家族全員へアンケートを実施して意見や要望の収集も取り組んでいる。
重点項目	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	地域密着型サービス事業所として地域に親しまれる事業所づくりをめざして、日々理念の実践に取り組んできた。町内会に加入し、町内会の一員として祭りや清掃活動など多くの町内イベントに参加している。町内会の総会や町内の会合があった時は、事業所の理念や、ボランティアの受け入れや事業所の行事などについて説明し、より多くの地域住民から事業所を訪れてもらえるように働きかけている。災害時などは、事業所が地域の避難場所として位置付けられており、地域からは事業所の取り組みが評価され、社会的な貢献も期待されている。

## 2. 評価報告書

(  部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
<b>理念に基づく運営</b>					
1. 理念と共有					
1	1	地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	「自らが受けたいと思う福祉と医療の創造」という法人理念に沿い、開設時に職員全員で事業所独自の理念を作り上げた。「事業所が地域に親しまれ」「利用者が笑顔と安らぎの暮らしを送る」「事業所での暮らしで利用者と家族の夢と希望が叶えられる」という理念であり、利用者、家族、地域、事業所が一体となった暮らしの実現に取り組んでいる。		
2	2	理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	理念を事務室の見やすい場所に掲示するとともに、日々のミーティングにて理念実現へ向けた取り組みについて職員間で話し合うなど、職員が理念への理解を深めるよう取り組んでいる。また、法人理念の実践に向けて職員の取り組みを評価する「職員自己評価表」の中から、毎月重点的に取り組む項目を事務所に掲示し、実践に取り組んでいる。		
2-2	3	家族や地域への理念の浸透 事業所は、利用者が地域の中で暮らし続けることを大切にしたい理念を、家族や地域の人々に理解してもらえるよう取り組んでいる	町内会議、自主防災会、民生委員や市議会議員の会議、また、事業所で実施するボランティアの集いや運営推進会議などの機会に、事業所の理念を説明し理念浸透を図っている。事業所での行事に家族や地域住民が訪れる際にも折に触れ理念の説明を行っている。また、パンフレットや広報誌、家族へのお便りにも理念を載せている。		
2. 地域との支えあい					
3	5	地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	町内会に加入し、祭り、草取り、町内会の総会や新年会など積極的に参加し、地域との関係づくり、地域交流の推進に努めている。回覧板には事業所の広報誌を挟み、事業所の取り組みを地域住民から知ってもらう方法としても活用している。回覧板を隣家に回すことは利用者の日課になっている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	管理者が職員にサービス評価の意義を説明した上、職員全員が3～4人のチームに分かれて各項目について話し合い評価を実施した。事業所としての自己評価は、職員が実施したものを管理者が集約し、職員と確認し合って作成した。自己・外部評価については会議等で検討し、改善に活かしている。		
5	8	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行ない、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回定期的に運営推進会議を開催し、委員や地域との情報交換の場、サービス評価について話し合う場として有効に活用し、サービスの質向上に取り組んでいる。サービスの実際を見てもらい意見を聞けるよう、毎回の会議の後、利用者と委員と一緒に昼食を摂る時間も設定している。欠席した委員へも会議録を送付し会議内容を伝え、次回につなげるようにしている。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	( 印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	9	市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	利用者の状況報告、介護保険の諸手続きや防災建築についての協議など、市担当者で連絡しあう機会を作っている。管理者が市が主催する会議や委員会にも参加し、連携に努めている。事業所の避難訓練の時は市担当者も協力を仰いだ。地域包括支援センターとも日常的に情報交換をしている。		
6 - 2	11	虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内で虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日常的に、管理者が中心となって職員の言葉掛けやケアなどに注意を払い、ミーティング等で徹底を図っている。法人で高齢者虐待拘束廃止委員会が組織されており、虐待防止に向けた活動に取り組んでいるところである。法人職員全員を対象とした年2回の内部研修を予定しているほか、事業所からも職員が委員会に参加しており、事業所内での虐待防止の研修計画を立てるなど啓発方法を検討している。		事業所では、高齢者虐待防止法や事業所のマニュアルを使用した内部研修を予定しており、研修を通じて職員の意識を高めようとしている。現在計画している研修が実施され、日常のケアに反映されることを期待したい。
4. 理念を実践するための体制					
7	14	家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	日頃の生活ぶりや職員の異動などについては、担当職員が利用者個々についてお便りを作成し毎月家族に送っている。利用者の体調に変化がみられた時は、電話で家族に連絡している。利用者の暮らしぶりを家族に見てもらおうと、家族に事業所に足を運んでもらえるよう働きかけている。		
8	15	運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	普段の家族との会話から意見聴取に努めると共に、年1回の家族アンケートの実施、意見箱の設置など家族の意見を広く聞き取るよう努めている。家族からの意見等は、運営推進会議で報告したり職員会議でも検討して運営に活用している。対応の結果はお便りなどを活用して家族にフィードバックしている。		
8 - 2	16	運営に関する職員意見の反映 運営者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、事務室に職員意見箱を設置して日頃から職員の意見を聞き取るように努めている。必要な場合には管理者が職員と直接面接して意見を聞くなど、職員が意見を言える機会を多く持つようにしている。また、法人本部と協力して年1回職員にアンケートを実施し、法人本部が意見を集約し、運営に反映するよう取り組んでいる。		
9	18	職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員の異動を行う場合は、一度に大人数ではなく少人数の異動とすることで利用者へのダメージを抑える工夫をしている。また、職員の異動によるダメージ軽減に向けてどのようにケアしていくかを職員で考え、利用者個々に合った声かけやフォローをしている。関係を途切れさせないよう、事業所を離れた職員がボランティアとして来訪することもある。		
9 - 2	18 - 2	マニュアルの整備 サービス水準確保のための各種マニュアルが整備され、職員に周知されている。また、マニュアルの見直しも適宜行われている	各種マニュアルを整備し、ユニット会議や事業所会議にて職員への周知を図っている。マニュアルは事務室に設置し、いつでも職員が確認できるようにしている。ケア方法については毎日のミーティングで随時意見交換し、マニュアルの変更が必要な場合は事業所会議にて話し合い変更をしている。現在、介護マニュアルなど事業所にあった独自の手順書の作成にも取り組んでいる。		現在、職員がより身近にマニュアルを活用できるよう、既存のマニュアルの中から必要な部分を絞り込み、トイレや浴室など実際のケアを行う場所へマニュアルを設置し、さらにケア水準を統一できるよう事業所独自のマニュアルの作成にも取り組んでいる。今後よりいっそうの活用に期待したい。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	( 印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
5. 人材の育成と支援					
10	19	職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者は、外部研修案内を職員に周知し、希望する職員が研修に参加できるようにしている。研修に参加した職員は事業所会議にて他職員へ伝達し、研修内容の共有化を図っている。事業所でも内部研修を実施しているほか、法人でも年度を通じて職員に応じた研修を計画し進めており、職員は自らの職責に応じた研修を受けることができる。		
11	20	同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内の他事業所との交流が活発に行われており、法人の各種専門委員会を通じた職員交流も盛んに行われている。また、職員が外部研修に参加した際は他事業所職員との交流をしている。		現在、地域にある介護保険施設との相互交流を計画し実現に向けて取り組んでいるところである。地域の他事業所と交流する機会づくり、職員が課題や悩みを相談できるネットワークづくりを進め、自らのサービスの振り返りや地域の抱える問題の共有化などに活用し、地域全体のサービス向上に取り組むことを期待したい。
11 - 2	21	職員のストレス軽減に向けた取り組み 運営者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる	職員の体調管理やメンタルケアのため、日頃から管理者が職員に声をかけ、必要時は個別面接するなどして問題や悩みの解決と一緒に取り組み、職員のストレス軽減に努めている。また、事業所の敷地内に休憩所を設け、職員が事業所を離れて休むことができるようにしている。		
. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	利用希望者には事業所での暮らしを知ってもらうため、事前見学を勧めている。また、ホームへの入居により、本人が今まで築いてきた家族や近隣住民等関係者との馴染みの人間関係が断ち切られないように、入居後も関係者から関わりをもってもらうなど工夫している。		
13	27	本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	日々の暮らしの中で、利用者と職員が相談しながら食事や炊作りなどを一緒に行っており、お互いの役割を持ち支え合いながら暮らす関係が築かれている。		
13 - 2	28	本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽を共にし、一緒に本人を支えていく関係を築いている	家族と一緒に利用者を支えていく関係を構築するため、利用者のホームでの暮らしをできるだけ細やかに家族に伝えるようにしている。行事を行う時は、お便りや電話、メールなどを使って家族へ参加を促し、利用者の暮らしに家族から関わってもらう機会づくりをしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
<b>その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の願いや希望を、日頃の会話から把握するように心がけている。思いや希望の把握が難しい利用者には、家族に確認したり、本人の身振りや仕草から把握するよう努めている。利用者個々の思いは職員間で共有し、実現に向けたケアに取り組んでいる。		
14 - 2	34	これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居の際に本人・家族・これまで利用していた福祉サービス関係者などから情報収集するほか、その後も本人や家族と関わる中でこれまでの暮らしについて情報収集を行っている。		利用者個々の生活歴は職員間の情報交換で把握しているが、記録として残っていない情報もあり、センター方式のアセスメント様式の一部を活用して整理・共有している進めているところである。今後確実な記録が行われることで情報共有が深まり、利用者への個別ケアが更に充実していくことを期待したい。
3. 多機能性を活かした柔軟な対応					
15	36	チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	本人と家族、職員がホームでの暮らしの課題やケアのあり方について相談する担当者会議を定期的に設け、それぞれの意見を介護計画に反映させるように努めている。担当者会議に参加できない家族へは、電話にて希望や意見を確認し、介護計画に反映させている。		
16	37	現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	介護計画は定期的に見直している。見直しの際は、家族の来訪時や電話などで利用者の暮らしぶりを相談し、意見を聞いている。利用者の急な変化などで見直しが必要な時には、暮らしに即した適切な介護計画へと随時変更している。		
17	39	事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	利用者の「あれがしたい」「これがやりたい」という希望を叶えることを基本として柔軟な対応を心がけている。利用者の馴染みの理容室、外食、商店街への外出支援、家族に代わる受診支援、食事の出勤など利用者一人ひとりの希望に添い、地域にある社会資源も有効に活用して支援している。		
18	43	かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からのかかりつけ医や、利用者と家族が希望する医師の受診が継続できるように支援している。定期的な受診支援はホームで行い、受診後は電話で家族に状況を伝えている。また、利用者が希望する医師と連携し、ホームへの往診にも来てもらっている。		
19	47	重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	重度化した場合や終末期に向けた事業所としての方針をまとめ、運営会議にて報告しており、利用者や家族への説明を始めているところである。それに基づき、かかりつけ医とも連携しながら、利用者や家族の希望に沿ってホームとして出来る支援を検討している。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	( 印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
<b>・その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1) 一人ひとりの尊重					
20	50	プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	法人職員の行動倫理についてまとめた「職員行動指針」をミーティング時に職員全員で確認し、日常のケアについてプライバシー確保の徹底を図っている。利用者の尊厳を大切に言葉かけをし、また、利用者の居室の戸はしっかりと閉めるなどプライバシーに配慮した対応を行っている。		
21	52	日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者がその日をどのように過ごしたいか希望を確認して支援している。利用者自身に危険が及ばない限りは、事業所の規則を優先することなく、一人ひとりのペースで生活できるように支援している。		
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者と職員が相談して献立を立てており、食堂には利用者が手作りした一日の献立表を掲示している。調理や後片付けは、カウンター式のキッチンに利用者と職員と一緒に立ち行っている。食事の時間は、利用者と職員が同じテーブルにつき、ゆっくり談笑しながら過ごしている。面会者や来訪者が食事を共にすることも多い。		
22 - 2	56	気持ちよい排泄の支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして気持ちよく排泄できるように支援している	排泄の失敗やおむつ使用者を減らすため、利用者の仕草や行動などから一人ひとりの排泄習慣を把握し、気持ち良く排泄できるように取り組んでいる。トイレ入口の表記は利用者自身にわかりやすいようにし、また、トイレ内にも花を置くなど家庭的な雰囲気づくりを工夫している。		
23	57	入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	日程や時間を決めず、利用者が入浴したいときに希望に合わせて入浴できるように柔軟に支援している。希望者には同性職員によるケアも提供している。浴室に花を生けるなど入浴の環境づくりにも工夫している。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	一人ひとりの心身の状態に応じて、畑作り・食事作り・歌や踊りなど、これまでの本人の暮らしにあった役割や楽しみをホームで見つけられるよう、本人や家族と相談して支援している。希望によっては、学習療法やトレーニング器具を使った機能訓練を行っている。		
25	61	日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	利用者の馴染みの場所である床屋、商店などへの日常的な外出の希望に対応している。利用者が季節を感じ、季節を味わい、季節を楽しめるような外出行事も計画・実施している。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	( 印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(4) 安心と安全を支える支援					
25 - 2	65	身体拘束をしないケアの実践 運営者及び全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人の高齢者虐待拘束廃止委員会を組織し、法人全体で拘束をしないケアの実践に取り組んでいる。身体拘束に関するマニュアルを整備し、マニュアルには具体的な禁止行為を挙げ、身体拘束をしないことを前提としたケアを提供している。毎日のミーティングでは、利用者のケアについて職員同士が情報交換を行い、身体拘束をしないケアの方法を検討している。		現在、身体拘束に関する定期的な研修会を予定している。職員の理解が深まるよう、今後のさらなる取り組みを期待したい。
26	66	鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	職員は利用者一人ひとりの状況を把握し、危険がないように見守りながら鍵をかけないケアを実践している。外出しようとする利用者もいるが、職員が付き添い危険がないように対応している。		
26 - 2	69	事故防止のための取り組み 転倒、窒息、誤薬、行方不明、火災等を防ぐための知識を学び、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組んでいる	法人のリスクマネジメント委員会が組織され、ヒヤリハット・事故の報告と再発防止への体制が整備されている。事故発生時は、対策や改善策をミーティングで話し合い職員間の共有を図るとともに、介護計画に反映させている。また、ヒヤリハットについては運営推進会議でも報告し、委員から意見を聴取し再発防止に活かしている。		
26 - 3	70	急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備え、全ての職員が応急手当や初期対応の訓練を定期的に行なっている	外部講師を招き、事業所に設置しているAEDの使用法や救急法に関する研修を定期的に行っている。具体的に起こりうる事態を想定した訓練も実施しており、職員全員が急変や事故発生時の対応の習得に取り組んでいる。		
27	71	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日頃より地域の人々の協力を得られるように働きかけている	消防署の指導を受けながら、町内会長、地域の自主防災組織、近隣住民、市担当者と協力した避難訓練を定期的に行っている。事業所では2回の大きな地震を経験したこともあり、地域の人からも速やかな避難誘導に協力してもらえるよう、行事など多くの機会を通じて来訪してもらって事業所の構造を知ってもらおうと働きかけている。また、事業所は所在する地域の避難場所としても位置付けられている。		
28	77	栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者一人ひとりの状態にあった食事量や形態とし、チェック表を用いて一日を通じて量が確保できるように支援している。毎日の献立表利用者と職員が相談して決めており、法人の管理栄養士が定期的に事業所を訪問し、献立の栄養バランスをチェックしている。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	( 印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
<p>2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり (1) 居心地のよい環境づくり</p>					
29	81	<p>居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている</p>	<p>食堂は穏やかな日差しが差し込む明るい空間であり、食堂や和室には自然と利用者や家族、職員が集い、ゆっくりと団欒を楽しんでいる。廊下の壁には季節に合った利用者の作品がきれいに飾られ、目を楽しませてくれる。また、生花やプランターで育てられた野菜などが随所に飾られ、季節感を感じることができる。</p>		
30	83	<p>居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている</p>	<p>ホーム側でダンスなどを備え付けているが、本人や家族の希望を聞いて馴染みの道具を自由に持ち込んでもらい、利用者が居心地よく暮らせる環境づくりに取り組んでいる。職員が利用者につき添い自宅まで馴染みの道具を取りに行くこともある。居室の家具の配置は、利用者の希望により自由に変更し、一人ひとりにあった生活環境がつけられている。</p>		